

ENGINEER

MPDP

ダイアリー



高崎 充弘

第51回 iF design award を受賞して ～ 日本のデザイン力 ～



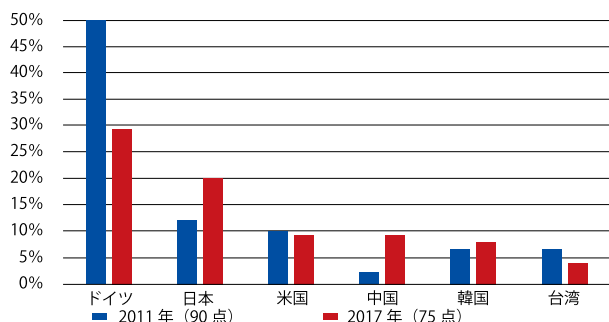
[Profile]

東京大学工学部卒業後、三井造船入社。米国レンスラー工科大学で修士課程修了後、(株)エンジニアの前身である双葉工具に入社。2004年に同社代表取締役社長に就任。独自の「MPDP理論」によるニッポンのモノづくり立国を提唱している。

前号ではミュンヘンで開催されたiF授賞式の様子についてご報告しました。今回は、iF design awardにおける日本のポジションがどう変化してきているのか、そしてそこから見えてくる日本のデザイン力と今後の課題について考察したいと思います。

まず、当社が最初にネジザウルスGTで受賞した2011年と、2度目の受賞をした2017年で、主要なiF受賞国の推移を調べてみました。応募総数は2011年が2757点(受賞993点)、2017年は5575点(同1931点)とエントリー数が2倍に増えており、デザインの重要性の認識が高まっていると思われます。今年は最高賞のgold awardが75点(2011年は90点)選ばれましたが、これらに占める日本やドイツ、米国、中国、韓国、台湾の比率の推移を比較してみました。

iF gold award受賞比率の推移



iF発表資料を基に筆者作成

グラフから分かるように、2011年には50%を占めていたドイツが30%以下に減少しています。これはiF賞がドイツのデザイン賞という位置付けから、世界で最も権威

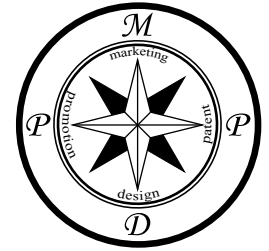
のあるデザイン賞へと進化していることを示しています。

さて、そのなかで日本は12%から20%へと増加しています。これはiFジャパン事務所が数年前に開設され、そのPR活動によって応募数が増えたことも寄与していますが、日本企業のデザイン力が着実にステップアップしてきているものと思われます。iF CEOのRalph Wiegmann氏が授賞式前日にBMW Weltにおいてご挨拶をされた際、日本のデザインのポテンシャルに対して大きな期待を寄せている旨のお話もありました。

一方で2011年から2017年で最もシェアを伸ばしているのが中国です。2%から9%へと4倍以上の急伸。韓国の横ばい、台湾の半減と比較すると、中国の急伸ぶりは顕著です。今後さらに中国の受賞が増え続ければ、米国や日本も追い抜かれてしまうかもしれません。

あるいは、特許出願件数でも数年前に世界一となった中国ですので、いずれドイツも抜き去ってiF gold award受賞数世界一となる日がくるのでしょうか？ただし中国からのiF賞への応募数は約1000点、そのうちの受賞数(gold award以外も含む)が約100点、受賞率は10%程度、一方日本は約500点の応募に対して200点以上が受賞しており、受賞率は40～50%とのこと。この数字から日本企業のデザインの「質」の高さは自信を持っていると思いますが、やはり「量」も大切です。

特許出願においても全く同じことがいえますが、大企業だけでなく、国内全企業数の99%以上を占めている中小企業が、デザインの重要性をより認識すれば、iF賞を受賞する日本企業もさらに増えていくと思います。



銀：この春、京都精華大学からのチームメンバーが2名増えましたな！ 合計5名やから「精華隊」一個小隊できそうでっせ！

ウ：工業高等専門学校からも1名入社。銀ちゃん、あんた、隊長なんやろ？ 責任重大やで！

高：3人とも入社前の3月に、知的財産管理技能検定3級にチャレンジしてくれたね。自己採点結果は？

ウ：1人は学科・実技ともに見事「一発合格」、もう1人が科目合格らしいでっせ。銀ちゃんの「一桁合格」(9回受検)とはエライ違いやで。(*^^*)

銀：もう～、新入社員の前でそんな昔話、蒸し返さんとしてんか！

ウ：「精華隊」は全員プロダクトデザイン学科出身やからMPDPではD：Design担当でっしゃろ。

銀：元・高専生はメカトロ学科卒業やから、P：Patentで活躍してもらいますわ。もう3級持っとるし……。

高：新入社員がMPDPのそれぞれの得意分野で、大いに力を発揮してくれるとうれしいね。

ウ：iF受賞数見たら、日本も最近頑張ってきてまんないか！

高：昔は大企業ですら「技術」が先行して、デザインが後回しにされがちだったが、「デザイン思考」(2016年5月号参照)の考え方も広まり、デザインが重視されてきているようだね。

銀：それに比べて、中小企業の経営者はデザインの重要性をいまだに認識してへんの？

高：いやいや、付加価値としてのデザインの重要性は分かっている。しかし、具体的にどのような取り組みをすればいいか分からないんだ。当社も以前はそういう状態だった。

銀：デザイナーさんって、どこにいてはんの？ 誰に頼んだらええんやろか？ お金いくらかかるんかな？

ウ：製品のプロダクトデザイン？ パッケージデザイン？ グラフィックデザイン？ はたまたWEBデ

ザイン？ お金なんぼあっても足らんわ！ (*_*)

高：当社も「デザイナーの2段階活用」(2013年10月号参照)などさまざまな試行錯誤を繰り返してきたが、win-winの関係が得られる相性の良いパートナーに巡り合うまではかなり時間がかかるんだ。

銀：社長はんも大阪府の産業デザインセンターへ、デザイナーさんを紹介してもらうために、よう行ってはりましたな。

高：最近では地方自治体や商工会議所などのデザイン相談窓口も充実してきているようだね。

ウ：最終的には「費用対効果」やから、自社にピッタリのデザイナーさんを見つけてほしいでんな。

高：ところで、私の失敗の経験から、「特許取るバカ、取らぬバカ、特許を取っただけバカ」という「特許3バカ」を自戒の意味でお話させていただいた(2014年6月号参照)が、デザインでも同じことがいえそう。

銀：「特許3バカ」ちゅうのは社長はんやったんでっか？ ほんなら「デザイン3バカ」はどうなりまんの？

高：「デザイン賞……受賞するバカ、しないバカ、受賞しただけのバカ」

ウ：「受賞するバカ」ちゅうのは、特許性、意匠性があるかもしれんのに、出願せんままデザイン賞にエントリーしてしても、公知になってしまうケースでっか。

銀：「受賞しないバカ」は、同じようなコンセプトの製品について、競合他社に先に賞を取られてしまうケースやな。二番煎じとなって、新鮮味がないし、プロモーションとしても大失敗や。

ウ：「受賞しただけのバカ」は、なんぼデザイン的に優れとっても、それだけやったらビジネスとして成功せえへん、商品が売れるとは限らんちゅうことでんな。

高：MPDPの4つが全てそろって初めてヒットするということだね。今回は、デザイン賞のエントリーと意匠出願の微妙な関係について考えてみよう。